

# しあわせな ろばのメシヤク

リンド・M・ホルマン / 作  
中村妙子 / 訳  
岩瀬慶彦 / 画



# しあわせな ろばのメジャク

リンダ・M・ネルソン / 作  
中村妙子 / 訳 岩瀬慶造 / 画



女子バウリング

# おかげあし でかび火のあは

著者 LYNDAL HAYES  
原書名 THE TORCH



## MY MASTER'S TORCH

by Lynda M. Nelson

Japanese translation Copyright © 2000 by Asahi Press Ltd

Original English language edition Copyright © 1990 by Lynda M. Nelson

All rights reserved including the right of reproduction

in whole or in part in any form.

This edition published in arrangement with Peigee Books,

of The Kodansha Publishing Group,

a member of Peigee Publishers Inc., New York

through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

© 2000, Tuttle Shoinzansha & Koto Imprints

文であり、相文であり、會相文である

ジョン・ウェンデル・ガーバー(一九〇四—一九九六)

地上の君あなたの家畜にあたるしいメンバーが知られることに  
あなたは心から歓迎してくれました。

毎日、あなたはわたしに

人生の義務にいかにかまめが

めかすまで情熱をもつていかにかまめが

身をもちて教えてくだりました。

そして今、あなたはわたしにわたしのさまがけとして謝文を

わたしにわたしのために直を贈りてくださいました。

ふたたび、とばりかなたに帰る日まで

時と天地の地を結んで

わたしは愛と感謝をあなたにささげます。



- 1 ななかし 8
- 2 川のほとりて 17
- 3 やみのなかから 19
- 4 油かみん 21
- 5 けわしい道 24
- 6 表に書たえられて 28
- 7 表はふたたび 101
- 8 バンと風の命 118



- 9 ご主人の手がふれるとき 125
- 10 最後の間 149
- 11 わたしはすすんで苦しみを受けます 154
- 12 丘の上へ 164
- 13 わたしについて歩いて 173
- 14 今も、そしていつまでも 184



これは、わたしたちの親い主イエスキリスト、

一生のあいだイエスキリストといっしょに歩いた、

小さなるばるの國です。

るばるのメシヤクは、イエスキリストを

「ご主人」とよんでいました。

## 一 なかよし

るばるのメシヤクは、イエスキリストが生まれるようになった夜、赤んぼの服のなかに入りました。赤ちゃんのイエスキリストより少し大きいだけの、子どもをよんでいました。

むかしむかし、ある遠い國に、小さな男の子とるばるが住んでいました。この二人は、やさしい、まっすぐな性質の子で、お父さんもお母さんも、その子をたいそうかわいがっていました。

るばるの体は棕色の毛におおわれ、背中に一本、黒いしほがありました。長いまつ

くしいしうばは悪、やはり悪くてかたいたてがみが頭の上に突つ立ち、おなかは真つ白ですが、二つの耳は灰色で、さきのほうがちよつと黒くなつていました。

この耳は、たまずうごいてはいるようでした。音のするほうにヒヨコと向いたり、そうかと思ふとピタリとうしろに寝かされたり、おきのほうを向いたり、何かいいたそうに急にヒョコッと突つ突つたり、男の手はろばの大きな黒い目を見つめ、二つの耳のうごきを見まもるだけで、ろばのいおうとしていることが何から何まで、よくわかるようでした。

さて、わたしの名はメシナク。わたしはじつは、その小さなろばなのです。なかよしの小さなその男の子を、わたしは「ご主人」とよんでいました。

こんなふうに、ご主人とわたしのことを話そうと心を決めたのは、わたしがある年をとつて、よばよばしているからです。まもなく、ご主人がわたしをむかえに来てくれるでしょう。そうしたら、わたしはもういっぺん、ご主人についていかなければなりません。

それはなりません。でもその前に、ご主人とわたしの物語を、みなさんにぜひ聞いてもらいたい——そう思つたのです。

ご主人が生まれた夜のことを、わたしはとてよくおぼえています。わたしが目をまますと、女の人がひくい声で苦しそうにうめいていました。わたしは、母さんによりよつて寝ていたので、とてもあたたかくていい気持ちだったので、赤ちゃんを産む苦しみと不安にたいして、せいいっぱいたたかっている、そのうつくしい女の人が、気の毒でたまりませんでした。

腹をなんとからくにしてやりたい、できることは何でもしようと思ふうちに立ちあがり、わたしの母は、女の人を、「だいいょうぶよ」というようにほほえみかけました。そして、うめき声もれないうちに、口を大きく開きました。でもそのうちに、苦しんでたまらなくなつたらしく、女の方は思はず大きなうめき声をあ

「あなた」とよびかけました。

男の人は、声をひそめて姿をいたわり、

「わたしはここにいますよ。心算はいいわい。」

とささやきました。でも、その手はふるえ、その目は、だれでもない、何でもない、宙の心の支えになつてくれるものはないかと、あたりを夢中で見まわしていましたが、赤ちゃんが無事に生まれたとき、ほつとしたのと、うれしいのとで、二人とも涙を流していました。

どんな赤ちゃんもそうですが、あたしの主人も、金づびつしよりぬれたしわだらけの赤ん坊として、この世に生まれてきました。ひんやりした夜の空気にびつくりしたのでしよう。とても大きな声をあげて泣いていました。

お父さんは、小さな体を手早くまれいにして、あたたかい毛布でくるみ、産まれてくるのに赤ちゃんを物ごとく無心にのばされているお母さんの手に、そつとわたし

ました。そして自分も、二人によりそうように寝になりました。お父さんとお母さんは、赤ちゃんの顔をのぞいては、うれしそうにささやきあつていました。

まもなく、いろいろな人がお祝いにやってきました。この世に生まれてきた赤ちゃんを歓迎しようと、それぞれに贈り物を持ってきたのです。

「ごらんなさい、あのきらきらした目！」

「小さいのに、顔の力のつよいこと！」

「おめでどう！ おめでどう！」

最後のお客の姿が戸口から消えたとき、お母さんと赤ちゃんは、ようやく眠りに落ちました。

赤ちゃんがはいはいをはじめると、わたしはときどき、鳥居のなかからそのようすをながめました。



「わたしがもうちよつと眠らうと横になつてゐるところに、赤ちやんがわらの上をはつてやつてきたときのことを、わたしは今でもはつきりおぼえています。赤ちやんは小さな手で、わたしのもじやもじやした乳をつかみ、やがて、わたしの背中にまじのぼりました。乳を引っぱられてもちつとも痛くなかつたのは、赤ちやんがとても軽かつたからでしょう。」

「背中にまじのぼると、赤ちやんはわたしの顔の近くに顔を寄せ、わたしの首の上にとつと乗りだして、小さな手でわたしの二つの耳をつかもうとしました。つかまれないように、わたしは耳をヒコヒコうごかしながら、横目で赤ちやんを見ました。赤ちやんは、これをすばらしいゲームだと思つてゐるようで、うれしそうに声をたてて笑つて、小さな手でわたしの顔をピシヤピシヤたたきました。そのまじりそうなきい声を聞くと、こつちまでうれしい気持ちになつたものでした。」

「そのころまでは、わたしも母さんといっしょに暮らしてゐました。母さんはもう